資 料

養育環境と幼児の心身症状

—— MS 式養育態度診断検査による因子分析的研究 ——

渡 辺 純* 広 利 吉 治** 松 本 和 雄***

A STUDY OF THE RELATION BETWEEN MOTHERS' ATTITUDES AND THEIR CHILDREN'S PSYCHOSOMATIC SYMPTOMS

—— A Factor Analytic Study by MS-Form Rearing Attitude Questionnaires ——

Jun WATANABE, Yoshiharu HIROTOSHI AND Kazuo MATSUMOTO

A questionnaire made of 71 items was presented to 211 mothers : of these, 119 had their child attending kindergarten (KG group), and 92 a nursery school (NS group) ; such groups were made in order to investigate the relation between environmental factors, mother's rearing attitude and their child's psychosomatic symptom or behavior, and also to extract some pathological factors from such rearing attitude and environment. Using the following three methods the obtained data were examined : 1. Comparison between KG group and NS group by each item's average score ; 2. Factor analysis for all subjects ; and 3. Comparison between the two groups by factor scores extracting seven factors and testing correlation coefficient into factor scores. The results showed some difference in rearing according to the environment, but no difference in child's psychosomatic symptoms and behavior between the two groups was observed. It was suggested that child's symptoms were caused by their mother's poor rearing attitude caused by poor rearing environment, for example, a decrease in relations with the neighborhood, etc.

Key words : rearing attitude, rearing environment, psychosomatic symptom, factor analysis, questionnaire.

目 的

子どもを取り巻く様々な環境の中で、最も直接的で且つ重大な影響を与えるものは、家庭での養育環境であろう (Rutter, M, 1975)。そして、子どもの年齢が低いほどより大きな要因となりえる。しかし、現代の著しい社会の変動に伴い家族構成員各々の役割が変化し、

親の養育に関する態度や意識に多様な考えが表われたり、生活形態の違いから家族が共に過ごす時間が減少したりと形態的にも精神的にも子どもを巡る家庭内の養育環境が大きく変容し、それが、子どもの成長発達過程に様々な影響を与えているものと推測される (繁多・大日向, 1988)。

我々は、親の養育態度と子どもの発達について主として質問紙を用いて一連の研究を行ってきたが (広利他 1990, 1991), 親の養育態度に影響する因子は非常に多様且つ複雑な環境的、心理的要因が含まれており、表層的な態度評価ですべて理解できるものではないことは、先行の研究 (渡辺他, 1990) でも強調してきたところであ

* 浪速短期大学 (Naniwa College)

** 東大阪市保育研究室 (The Research Room for Handicapped Children in Nursery School, Higashiosaka City Office)

*** 関西学院大学 (Kwansei Gakuin University)

る。そこで、主な養育者としての母親の就労に差異があると考えられる幼稚園と保育所に在籍する子どもと親について養育態度に影響すると思われる環境的因子と日常生活での子どもへの係わり方や頻度等の養育行動と子どもの示す心身の症状や行動との関連を検討することにより、養育環境や養育行動における病理的因子の抽出を試みることを目的に本研究を行った。

対象と方法

対象は、H市内の公立保育所とO市内の私立幼稚園に在籍する4、5才児とその母親で、保育所92組(平均年齢5.73才、以下NS群とする。)と幼稚園群119組(平均年齢5.64才、以下KG群とする。)の計211組である。

方法は、母親に対して子どもの心身の症状についての26項目、子どもの玩具や絵本の数等の直接的な養育環境や父や祖父母の育児への協力、意見の一致等の母親を支える間接的養育環境に関する22項目、及びMS式養育態度診断検査の23項目(TABLE 1)の計71項目の質問紙を作成し、平成3年2～4月に実施した。MS式養育態度診断検査とは、広利、松本他(1990)が作成した母親の養育態度を臨床的に把握し、母親の理解や指導等を目的とする簡便な質問紙である。また、養育環境とは両親の養育態度も含めた養育者が子どもに対してとっている心理的、物理的態度、及び養育のための物質的、経済的配慮等を総括的に表わそうとするものである。

上記の質問紙から得られたデータについて

1. KG、NS両群の各質問項目の平均値の差の検定
2. 両群211名全体を対象とする探索的因子分析
3. 抽出された因子の因子得点による両群間の比較と因子得点間相関の検討

を通して親の養育態度、養育環境と子どもの心身の症状、行動との関連について検討した。質問項目は絵本の蔵書数、就労時間、叩く回数等の具体的回数を記入する9項目を除き、非常に、はい、ちがう或は、しばしば、時々、いいえの3段階評価である。まず、1.ではその3段階に3、2、1点を与え、尺度項目に対する得点の合計を尺度得点とし、その平均値を算出し、両群の有意差の検定を行った。

2.では、項目間の積率相関係数を算出し、次に、スクリーテストにより因子数を決定し、繰返し法による共通性の推定、主因子解、Varimax解、Promax解を求め、7因子を抽出した。更に、3では、2で抽出された7因子について両群それぞれ因子得点の平均値を算出し、2群間の比較を行った。最後に、因子得点間

TABLE 1 MS式養育態度診断検査質問項目

1. 教育やしつけの方針が家族間で一致しない。
2. 夫婦間、嫁姑間等家庭内にもめごとが多い。
3. 子どもは親に従うべきである。
4. しつけのため体罰も必要である。
5. 日頃子どもに小言が多い。
6. 子どもの欠点ばかり目につく。
7. 何事によらず他人から後ろ指をさされることは絶対にしたくない。
8. 親として子どもの勉強内容、特に成績は全部知っておきたい。
9. 子どものすることはまどろこしくて、つい親が手伝ってしまう。
10. 子どもは勉強やおけいこで忙しく、遊ぶ暇がない。
11. 私はいわゆる子ばんのうである。
12. 子どもを目に入れても痛くない気持ちは共感できる。
13. 一日でも子どもがいないと落ち着かない。
14. 子どもにしつこく要求されると最後は負けることが多い。
15. 手を洗わずに食事をすると味までわるくなるように感じる。
16. 私はすぐカーツとなる性である。
17. 子どもが病気になると死ぬのではないかと不安になる。
18. 子どもが戸外で遊んでいると大けがをするのではとこわくなるがよくある。
19. そのときの気分で子どもを叱ることがよくある。
20. 布団などが曲がっていると眠りにくい。
21. 子どもに腹のたたない日はない。
22. 私は元来一人でいるのが好きだ。
23. 家庭内の誰が何をしても一向に気にならない。

の相関係数から因子間の検討を行った。尚、因子得点の算出については、

$$KG群: F_{KG} = Z_{KG} \cdot W_{KG+NS}$$

$$NS群: F_{NS} = Z_{NS} \cdot W_{KG+NS}$$

(F: 因子得点 Z: Zscore W: weight matrix)

$$W = R^{-1}A_{fs}$$

(A_{fs} : primary factor structure R: 相関行列 R^{-1} :

相関行列の逆行列)

の公式により求めた。ここで、個人の因子得点は、WとZの積で表わされる。以上の方法により両群について各因子ごとに平均値の算出を行い比較を行った。

結 果

1. 項目得点の平均値による両群比較

両群を比較すると、TABLE 2の通りKG群では、心身の症状については、「乗り物酔いをする」「偏食がある」「よく風邪をひく」の3項目に有意差がみられた。また、養育環境では、「ひとりで友達の家や近くの店へ簡単な買い物にいったりする」「子どもは花やペットが

好きである」「子どもが牛乳をこぼしたら親が片付ける」「子どもが牛乳をこぼしたらしかる」「園であったことを子どもと話しをする」「子どものことについて、父親と話し合う」「友達や近所の人と子育てについて話し合う」「子どもの育て方について父親や祖父母と一致している」「子どもを叩いた回数」「子どもを連れて外出する回数」「近所の友達の数」の11項目が、また、養育態度では、「その時の気分で子どもを叱ることがよくある」「何事によらず他人から後ろ指をさされることは絶対したくない」「しつけの為には体罰も必要である」の3項目に0.5～5%のレベルで有意に高い値が認められた。

一方、NS群では、子どもの行動や心身の症状については、「甘えん坊である」「夜尿がある」「寝つきが悪い」「寝起きが悪い」「睡眠が浅い」「爪かみがある」「指しゃぶりがあがる」の7項目が、養育環境については、「子どもが牛乳をこぼしたら自分で片付けさせる」「祖父母が育児に協力してくれる」「子どもに絵本やお話をよくする」及び「母親の就労時間」の4項目が0.5～5%のレベルで、また、養育態度では、「子どもを目にいれても痛くない気持ちは共感できる」「教育やしつけの方針が家族間で一致しない」「子どもは勉強やおけいこで忙しく、遊ぶ暇がない」の3項目が0.5～1%のレベルで有意に高い値を示した。

つまり、心身の症状では、KG群に身体面の症状が、NS群では生活習慣や習癖の問題として表われやすいといえた。また、養育環境に関しては、KG群では、子育てについて家庭内や近隣の人とよく話し合い、母子で行動する機会が多いことがみられ、NS群では、祖父母の協力がある半面、家庭内の意見が一致しないことがあることがいえた。そして、養育態度では、KG群は、子どもに対してやや過干渉、或は、支配的な面がみられ、NS群では、子どもの自立的な行動を促しているが、不安も高くもっていることが考えられた。

2. 7因子の解釈

対象211組全体を因子分析した結果、TABLE 3の通り7つの因子が抽出された。相対的に負荷量の大きい項目を取り出すとTABLE 3の通りとなった。第1因子は、ぜん息やよく風邪をひく等の心身の症状と親が子どもの行動に手出ししすぎたり、肩がわりする親の過干渉或は過保護といえる項目が同時に負荷を示し、『子どもの心身の症状と母親の過干渉を表わす因子』である。

第2因子は、子どもに本を読んだり、ほめたりする親の態度及び両親や家族の方針の一致についての項目

TABLE 2 平均値において有意差のみられた項目

KG群に高い項目	NS群に高い項目
心身の症状、行動の問題	心身の症状、行動の問題
6. 乗り物酔いをする。 ***	1. 甘えん坊である。 ***
9. 偏食がある。 *	11. 夜尿がある。 **
14. よくかぜをひく。 ***	16. 寝つきが悪い。 ***
	17. 寝起きが悪い。 **
	18. 睡眠が浅い。 **
	19. 爪かみがある。 *
	20. 指しゃぶりがあがる。 **
養育環境	養育環境
32. ひとりで友達の家や近くの店へ簡単な買い物に行く。 ***	36. 子どもが牛乳をこぼしたら自分で片付ける。 **
33. 花やベットの好きである。 **	41. 祖父母が育児に協力してくれる。 ***
37. 子どもが牛乳をこぼしたらしかる。 ***	44. 絵本やお話をよくする。 *
38. 子どもが牛乳をこぼしたら親が片付ける。 ***	52. 母親の就労時間 ***
39. 園であったことを子どもと話しをする。 **	
40. 子どものことについて父親と話し合う。 ***	
42. 友達や近所の人と子育てについて話し合う。 *	
43. 子育てについて父親や祖父母と一致している。 *	
46. 子どもを叩いた回数(1週) **	
49. 子どもを連れて外出する回数(買い物、公園、散歩等) ***	
51. 近所の友達の数 ***	
養育態度	養育態度
56. その時の気分で子どもをよくしかる。 ***	58. 子どもを目にいれても痛くない気持ちは共感できる。 **
67. 何事によらず他人から後ろ指をさされることは絶対にしたくない。 **	62. 教育やしつけの方針が家族間で一致しない。 **
70. しつけのためには体罰も必要である。 **	71. 子どもは勉強やけいこで忙しく遊ぶ暇がない。 ***

(*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.005$)

に負荷を持ち、『安定した養育態度に関する因子』である。

第3因子は、MS式養育態度診断検査の23項目の中の「子どもを目に入れても痛くない気持ちは共感できる。」「一日でも子どもがいないと落ち着かない。」「子どもが病気になると死ぬのではないかと不安になる。」の不安尺度を示す4項目と、「何事によらず他人から後

TABLE 3 7 因子の構成項目と因子負荷量

第1因子 (子どもの心身の症状と母親の過干渉)	
9. 偏食がある。	394
12. ぜんそくがある。	256
14. よくかぜをひく。	318
31. 自分でおもちゃを片付ける。	-346
37. 子どもが牛乳をこぼしたら自分で片付ける。	-586
38. 子どもが牛乳をこぼしたら親が片付ける。	570
64. 子どものすることはまどろこしくて、つい親が手伝ってしまう。	451
65. 子どもにしつこく要求されると最後は負けることが多い。	456
第2因子 (安定した養育態度)	
15. 家事などのお手伝いをする。	349
27. 子どもがいつも自分で出せるような場所におもちゃが置いてある。	285
28. 子どもを買い物に連れて行く。	373
29. 子どもに本を読んでやる。	717
30. 子どもに歌をうたってやる。	515
33. 子どもは花やベットが好き。	272
34. 子どもをほめてやる。	422
40. 子どものことについて父親と話し合う。	372
43. 子どもの育て方について父親や祖父母と一致している。	346
44. 絵本やお話しをする。	654
45. 子ども用の本の数	525
48. 父親と子どもと一緒に遊ぶ回数/週	265
第3因子 (母親の不安や支配的態度)	
58. 子どもを目に入れても痛くない気持ちは共感できる。	578
59. 一日でも子どもがいないと落ち着かない。	693
60. 子どもが病気になるや死ぬのではないかと不安になる。	569
61. 子どもが戸外で遊んでいると大怪我をするのではとこわくなる。	380
67. 何事によらず他人から後ろ指をさされることは絶対にしたくない。	394
68. 親として子どもの勉強内容、特に成績は全部知っておきたい。	437
69. 私は、いわゆる子煩悩である。	513
第4因子 (母親の就労と子どもの生活)	
16. 寝つきが悪い。	-334
29. 子どもに本を読んでやる。	-369
32. ひとりで友達の家や近くの店へ簡単な買い物に行く。	318
44. 絵本やお話しをする。	-408
51. 近所にいる子どもの友達の数	467
52. 母親の就労時間	-435
第5因子 (子どもの行動や習癖上の問題)	
16. 寝つきが悪い。	355
18. 睡眠が浅い。	412
22. 一瞬気を失って変な動作をする。	594
23. 夜中に変な動作がある。(歩き回わる、大声をだす)	503
25. 園に行くのを嫌がる。	358
26. 性器をよくさわる。	323
第6因子 (母親の拒否的態度と体罰)	
35. 子どもが牛乳をこぼしたら子どもをたたく。	416
38. 子どもが牛乳をこぼしたらしかる。	337
46. 先週に子どもをたたいた回数	471
54. 日頃子どもに小言が多い。	502
55. わたしはすぐカーツとなる性である。	539
56. その時の気分で子どもを叱ることがよくある。	614
57. 子どもに腹のたたない目はない。	571
63. 子どもの欠点ばかり目につく。	381
第7因子 (母親の不適切な関心)	
63. 子どもの欠点ばかり目につく。	405
70. しつつけのためには体罰も必要である。	285
71. 子どもは勉強やけい古で忙しく遊ぶ暇がない。	531
73. 布団などが曲がっていると眠りにくい。	344
74. 私は元来一人でいるのが好きだ。	366
75. 家族内の誰が何をしても一向に気にならない。	491

小数点省略

ろ指をさされることは絶対にしたくない。」「親として、子どもの勉強内容特に成績は全部知っておきたい。」「私はいわゆる子煩悩のうである。』の子への支配を示す3項目が併せて抽出され、これは、子どもの行動や子育てに対する『母親の不安と支配的態度を示す因子』である。

第4因子は、就労時間が長い母親ほど子どもに本をよんでやったり、話しをする時間が長いこと等一見矛盾する項目を同時に含む因子であるが、これは就労している母親の養育態度を反映するものであろう。つまり、子どもと共に何かをして過ごす時間を惜しんで子どもと接触を保つ努力や養育時間の不足を補おうとする態度の表われと考えられる。母親の就労時間が長いほど子どもが保育所や幼稚園で過ごす時間が長くなり、地域社会との接触が減少し、家庭の近隣の子供との関係が希薄になり、また、買い物やおつかい等社会的行動の減少も認められる。以上より、この次元は、母親の就労時間とそれに影響を受けた子どもの生活実態を表わし、『母親の就労と子どもの生活を表わす因子』である。

第5因子は、「寝つきが悪い」「夜中に変な動作がある」「園に行くのをいやがる」「性器をよくさわる」等の『子どもの行動や習癖上の問題を示す因子』と考えられる。

第6因子は、MS 式養育態度診断検査のうち拒否を示す尺度項目である子どもに対して腹をたてる。小言をいう。又は叩く及び母自身すぐにカーツとなるの4尺度に加え、子どもを叩く回数、子どもが失敗したときに叩くという体罰の項目に負荷をもち、『母親の拒否的態度と体罰に関する因子』である。

第7因子は、MS 式養育態度診断検査の項目の中から「私は、元来一人でいるのが好き」「家族内の誰が何をしても一向に気にならない」「布団が曲がっていると眠りにくい」という母親の孤立的な性格と他人への無関心、そして強迫的傾向を表わす項目と、「子どもの欠点が気になる。」や「体罰も必要とする。」という不適切な関心や係わりを示す項目に負荷をもち『母親の不適切な関心を示す因子』と考えられる。

3. 因子得点による両群比較

以上の7因子についてKG群とNG群を因子得点により比較すると、TABLE 4の通りとなり、第1, 3, 5, 7の4因子では差はみられなかった。つまり、子どもの心身症状や行動、習癖の問題については両群で差がないといえた。また、母親の不安や支配的態度、そして母親の無関心や不適切な関心を表わす養育態度

についても差が認められなかった。

一方、第2因子の安定した養育態度と第6因子の母親の拒否的態度と体罰の2つの因子でKG群が5%レベルで有意に高い値を示した。また、当然母の就労時間に負荷をもつ第4因子でNS群が1%レベルで有意に高い値を示した。

4. 因子得点間相関

TABLE 5 に示す因子得点間相関をみると、第1因子(子どもの心身の症状と母の過干渉)と第4因子(母親の就労と子どもの生活)は、KG群では-0.410、NS群で-0.528と両群とも負の相関を示した。更に、第1因子と第5因子(子どもの行動や習癖上の問題)はKG群で0.388、NS群で0.390となり、第2因子(安定した養育態度)と第4因子はKG群では0.450、NS群では0.424であり、両群とも正の相関を示した。

また、KG群では、第3因子(母親の不安と支配的態度)と第7因子(母親の不適切な関心)が0.401、第5因子と第7因子が、0.422の相関を示した。

TABLE 4 因子得点の平均と有意差 (KG群とNS群との比較)

因子	KG群		NS群		有意差
	MEAN	SD	MEAN	SD	
1 F 1	.066	.843	-.085	.975	NS
2 F 2	.111	.858	-.144	.964	*
3 F 3	-.024	.899	.031	.911	NS
4 F 4	.422	.648	-.572	.801	**
5 F 5	-.009	.877	.010	.900	NS
6 F 6	.108	.953	-.139	.844	*
7 F 7	-.014	.699	.018	1.054	NS

(*: p<.05 **: p<.01)

TABLE 5 因子得点間相関 (上三角: KG群 下三角: NS群)

因子	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7
F 1		-.064	.111	-.410	.388	.189	.220
F 2	-.085		.120	.450	.091	-.063	.056
F 3	-.212	.027		.019	.219	.265	.401
F 4	-.528	.424	.174		.019	.166	-.001
F 5	.390	.034	.111	-.107		.329	.422
F 6	.425	-.188	.145	-.272	.473		.269
F 7	.144	-.133	.260	-.033	.197	.205	

小数点省略

NS群では、第1因子(心身症状並びに過干渉)と第6因子(母親の拒否的態度と体罰)が0.425、第5因子と第6因子が、0.473の相関を示した。

以上より、KG群とNS群とでは、当然、母親の就労時間を中心とした養育環境に差が認められたが、子どもの心身の症状と母親の過干渉や安定した養育態度では両群共に0.4から0.5レベルの相関をもち、母親の就労時間を含む子どもの生活全般としては養育態度や子どもの問題に影響があると考えられる。また、母親の不安も無関心や不適切な関心等の母親自身の矛盾した態度は、KG群において子どもの行動上の問題に結びつき、一方、NS群では、母親の拒否的態度が子どもの心身症状や行動上の問題に結びつく傾向が認められた。

考 察

乳幼児期は、子どものそれ以後の心身の発達に大きな影響を与えていることは周知のことである。Bowlby, J.(1979)らの多くの研究を引くまでもなく、この時期の母子関係が重要な意味を持つことも言をまたない。しかし、現代社会の中で家庭機能の低下、地域、近隣の互助作用の希薄化が指摘されるようになり、また、母性や育児に対する認識も変容しつつあるのではと考えられる。そのような現状の中で、単に、「拒否的」とか「受容的」といった親の養育態度を行動レベルで分類するだけで終わるのでなく、親の養育行動と周囲も含めた養育環境がどのように関連し、それが子どもの心身の症状に影響を与えているかを構造的に把握し、その背後にある要因を探ることが重要であると考ええる。本研究では、因子分析の手法を用いて、母親の養育行動についてそれに影響を与えられと考えられる養育環境や母親の性格等の背景要因と子どもの心身の症状との関連にいくつかの知見が得られた。

KG群とNS群で当然就労時間に差異があり、母親及び子どもの近隣との交流の様子に違いがみられたが、心身の症状や行動上の問題、習癖の問題に大きな差はみられなかった。また、両群とも母親の養育態度と子どもの心身の症状や行動上の問題、習癖の問題に相関がみられたことから、子どもと過ごす時間について、時間に余裕がもてる親は、当然子との接触時間も増加し、本を読んでゆったりする時間や親同士、子ども同士で近隣との関係ももてるが、親が子どもの行動に手出ししすぎたり、叱る叩くといった行動も増加するといえた。就労時間が長く家庭での時間が少ない親は、祖父母の協力を得ながら、子どもにも自立的行動を促し、短い時間で子供との接触を試みているようである

が、親も子も近隣との係わりが乏しいといえた。母親の就労により子どもと接する時間に差異があり、その影響が問題とされることが多いが今回の結果からは、単に、接触時間が問題となるのではなく、その時間を子どもとどう過ごすかが重要であると考えられた。つまり、接する時間が多くあってそれをうまく活用し安定した養育態度で接することができる母親と子どもの行動をみる機会が増加するため過度の干渉につながる母親が存在すると考えられる。また、接する時間が短いことから拒否的な態度や体罰に結びつく母親と自立を促している母親のタイプが存在すると推測され、母親自身の不安、拒否、無関心や不適切な関心等がその根底にあることが子どもと係わる時間に影響を与えていると推測された。

心身症状や行動上の問題に関しては、母親の態度と子どもの問題の現われ方に違いがみられた。つまり、両群とも過干渉と心身の症状と母親の就労時間と子どもの生活とは負の相関を示した。また、KG群では、親の無関心や不適切な態度が行動上の問題と正相関を示し、NS群では、親の拒否、体罰が子どもの心身の症状や行動上の問題と正の相関を示していた。ここでも、母親の就労時間が、子どもの様々な心身や行動の問題に単純に関連するのでなく、養育態度に問題を持つ親の群が、就労に伴い近隣との接触の減少、両親間の養育態度のずれ等の養育環境の影響を受けて子どもに様々な問題を生じさせるという構造が示されたと考ええる。

今後、対象を広げ養育態度と養育環境及び子どもの情緒的問題、更には、発達への影響の構造的把握を深めていくと同時に臨床事例研究等（広利他、1992）を通じて、一連の研究で得られた結果の妥当性の検討を行って行きたい。

謝 辞

論文作成にあたり、御指導頂いた大阪大学精神医学教室 西村健教授に深謝いたします。

引用文献

- ボウルビー, J. 作田 勉訳 1981 ボウルビー 母子関係入門 星和書店 (Bowlby, J. 1979 The making & breaking 111 of affectional bonds. Tavistock Publications)
- 繁多 進・大日向雅美編 1988 母性 ころこ, からだ, 社会 新曜社 東京
- 広利吉治他 1990 親の養育態度と子どもの発達(I) —MS 式養育態度質問項目の尺度化の妥当性の検討— 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 158.
- 広利吉治他 1991 養育環境と子どもの情緒的発達および心身症状 日本心理学会第55回大会発表論文集, 780.
- 広利吉治他 1992 幼児の進行性難聴に伴う集団不適応・心身症状そして退行と自我回復過程 日本小児精神神経学会第67回大会抄録集 13.
- 大日向雅美 1985 母性をめぐる現状と問題点 保育の情報, 94, 2—11.
- ラター, M. 久保紘章・門 真一郎(監訳) 1983 子どもの精神医学 ルガル社 (Rutter, M. 1975 Helping Troubled Children. Penguin Books.)
- 渡辺 純他 1990 親の養育態度と子どもの発達(II) —HRSH 及び MS による因子分析的研究 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 159.
- (1992.9.11受稿, 1993.2.1受理)